開発協力の主要な関心事であり続けている。『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』では，目指すべき世界像として，「人種，民族及び文化的多様性に対して尊重がなされる世界」を掲げている。これは，「降りてきた」開発をさらにその地平に定着させる動きともいえよう。本書における自立と依存の関係性の再定義や，日本特有の集団主義を取り上げた第7章で，「競争と個人主義に立脚した近代社会が行き詰まりを見せている現代世界に，日本やアジアから『もう一つの開発』のあり方と多系的な世界の可能性の広がり」（p. 212）を見ようとする著者の一連の主張は，開発学を2030年以後を見据えた新たな地平へと導く可能性をもつ指摘である。その意味においても，開発協力の未来を想像し創造するために，本書がすべての開発研究者，地域研究者にとっての必読の一書であることは間違いない。本書を出発点にして新たな開発協力論とその実践が展開されることを期待したい。

（関根久雄・筑波大学人文社会系）

参考文献

Giddens, A. 1990. *The Consequences of Modernity*. Stanford: Stanford University Press.

関根久雄. 2015.『地域的近代を生きるソロモン諸島――紛争・開発・「自律的依存」』つくば：筑波大学出版会.

――――. 2018.「開発と文化」『詳論文化人類学』桑山敬己；綾部真雄（編），191–204ページ所収. 京都：ミネルヴァ書房.

UNESCO. 1982. *Mexico City Declaration on Cultural Policies*. World Conference on Cultural Policies, Mexico City, 26 July–6 August 1982. https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000052505.（2022年4月9日閲覧）

武内房司（編）.『中国近代の民衆宗教と東南アジア』研文出版（山本書店出版部），2021, 266p.

広く知られているように，世界最大の移民集団である華人・華僑は，その多くが東南アジアに居住している。実際，域内の政治・経済を語る上で彼らの存在を無視することはできず，各国研究においても華人は近代国家における重要テーマの1つに位置付けられてきた。それは文化も例外ではなく，中でも中国民衆宗教の展開と実践は，儒仏道の三教合一や寺廟といった類似施設の存在，華人共同体の多義性，更には各国における政策の違いも相まって捉え難い反面，そこには近代西洋とは異なる価値観が存在しているとして多くの関心を集め続けている。

もっとも，中国民衆宗教の成立や伝播の過程には，依然として曖昧な点が残されていることも否めない。これは決して，従来の研究が歴史を軽視してきたことを意味するものではなく，そもそも清末民国期の中国では多くの結社が誕生しては分裂・継承を経験しているため，その複雑な系譜を理解するためには，たとえ当事者たちの見解であろうとも慎重な検討が求められるからである。また，結社の内情を理解するためには，適切な一次資料へのアクセスや，現地に対する深い理解も不可欠である。そのため横断的な研究は難しく，域内に広く浸透しているはずの中国民衆宗教でありながら，研究はタイ・マレーシア・シンガポールといった一部の国に集中してきた。

本書が扱う東初祖派・明師道・同善社・道院は，何れも清代民衆宗教である青蓮教の流れを汲む宗教結社（宗教団体）である。これら青蓮教各派は，多くの華人結社と同様に衆生救済や三教合一を唱えてはいるが，東南アジアには19世紀後半から広まっている上（例えば，多くの研究蓄積がある善堂は20世紀に入ってから），その布教地域にはベトナムが含まれている。本書は，歴史学の立場からこの中国民衆宗教の伝播と現地社会への適応ならびに影響を考察した，意欲的な一冊である。

下記の通り，本書は冒頭における総論と6つの論文から成る本論，2つの付録から構成されている。とはいえ，全体の半分以上を編者が執筆している事実が示しているように，特に第1章から第3章にかけては内容に連続性が認められる。そのため，以下では便宜的に本書を3つに分け，その要旨を整理していくこととしたい。

総論「近代ベトナムの華人社会と宗教運動」（武内房司）
第1章「近代華南の宗教運動――青蓮教東初祖派の登場」（武内房司）
第2章「『明師道』の成立――ベトナムに根づく近代華南の民衆宗教」（武内房司）
第3章「カオダイ教――三教合一運動のベトナム的展開」（武内房司）
第4章「独立以降から公認化までの明師道の歩み――明師道に関するベトナム国内の研究と私の聞き取り調査」（今井昭夫）
第5章「近代東南アジアにおける『先天大道』の伝播――同善社と南洋聖教会」（小武海櫻子）
第6章「日本統治初期のシンガポールにおける紅卍字会の救災活動――『新加坡道院訓文』の発見とその分析」（持田洋平）
付録1「厳璩『越南游歴記』訳注」（武内房司）
付録2「ベトナム明師道系仏堂所蔵漢喃経巻目録稿」（武内房司編）

総論から第3章で述べられているのは，青蓮教の中から東初祖派が誕生し，それが東南アジアに伝播した後に現地社会に影響を与えていく過程である。具体的には第1章において，青蓮教の核にあるのが救済論であることが指摘され，その他者救済の思想が海外布教に力を入れる背景にあった事実が示される。中でも東初祖派の歴代指導者たちは禅宗の系譜に列なる者と位置付けられており，この大乗仏教に対する親和性こそがベトナムにおける教勢拡大に繋がった可能性が指摘される。第2章では，東初祖派による東南アジア布教の全容が示された後，その系譜を引く明師道がベトナムに定着していった過程が明らかにされる。当時の資料によれば，東初祖派は初期より華人だけでなく現地人への布教も実現させており，20世紀初頭には高い位階を与えられるベトナム人も出始めていた。このような宗教家の中には，やがて民族運動に携わる者も含まれるのだが，著者はそこに独自の救済思想の芽生えを見出している。そして第3章では，1920年代のベトナムで誕生したカオダイ教にも，明師道の経典が取り込まれていった事実が明らかにされる。1930年代に入りカオダイ教は分裂し，明師道の教えを保持する一派も独立を果たすのだが，彼らは間もなく共産党に接近していく。この決断の背後には，青蓮教由来の救済志向が存在していた可能性が指摘される。

第4章から第6章では，3人の研究者によりベトナムとマラヤ・シンガポールの事例が考察される。第4章の今井論文では，明師道に関する先行研究が整理された後，ベトナムにおける同宗教の現状が明らかにされる。中国に起源を有する明師道は，そもそもベトナム社会主義革命や民族文化への貢献を語ることが難しい。そのため，政教双方の公式見解には曖昧な描写が目立つのだが，ベトナム国内各地で実施した聞き取り調査からは，半世紀以上にも及ぶ政治的影響や，今日における現地化の実態が浮かび上がってくる。次いで第5章の小武海論文では，20世紀のマラヤにおける同善社の定着過程が明らかにされる。特に，活動拠点であったシンガポールにおいて彼らが行っていたのは，既存の地方閥に捉われない“開かれた”活動であり，それは日本による占領が始まった1940年代には社会活動として発展を遂げている。また，儒仏道の三教にキリスト教・イスラームを加えた五教合一の思潮が生まれた背景に，多文化が混在するマラヤの社会状況があった点が指摘される。最後の持田論文も同じく日本占領期のシンガポールを舞台としているが，ここでは紅卍字会の社会活動に焦点が当てられている。宗教団体の内部資料を通した分析からは，既存の社会秩序が混乱に陥っていた1940年代初頭，彼らが組織立った救済活動を展開できた背景に，神託の存在があった可能性が指摘される。

巻末に付録1として収録されているのは，1905年，清朝の外交官である厳璩がベトナム各地を訪問した後に記した報告書の翻訳である。総論においても触れられているその記述には，フランス人植民地官僚らによる華人評だけでなく，地方閥の影響が強い当時の華人社会の実態が描かれており，資料的価値が高いだけでなく読み物としても興味深い内容となっている。また，付録2では，編者らの調査過程で明らかとなった明師道が所蔵する経典129冊の情報が一覧として収録されている。

これらは主に19世紀末から20世紀初頭にかけての漢文・チュノム・クオックグーで記されたものであるが，その備考には，編者の手により著者名をはじめとする概要も付け加えられており，単なる一覧以上の情報が含まれている。

ここで改めて，本書の優れた点を述べておきたい。真っ先に挙げるべきは，中国民衆宗教を東南アジアの文脈で描いた事実であろう。冒頭で述べたように，既に多くの研究を有する同分野であるが，その関心は祖国との繋がりや文化の保持，共同体の紐帯に集中しており，ともすると異国における“中国探し”の様相を呈してきた。それ故に，華人共同体の外部にあるはずの地域社会については言及されないことも多いのだが，本書では今日の華人社会が各国の状況に合わせ変化しているように，現地社会もまた華人の影響を受け変化してきたことが考慮に入れられ，特にベトナムにおいては後の宗教・政治運動にまで影響を与えたことが示唆されている。このような問題意識は総論における見出し「華人社会を超えて」（p. 25）にも表れているが，それを論証できるだけの調査を重ねたことが，本書が他に類を見ない成果をもたらした要因となっている。

また，歴史の専門家たちが執筆しているだけあり，何れの論文においても資料的な厚みを認めることができる点も評価したい。特に編者の執筆部分に顕著であるが，本書に収録されている論文では，各地に残されている碑文や経典・神託集といった宗教文献を中心に，中国語やベトナム語・フランス語資料を駆使することで，中国民衆信仰の伝播と受容をより客観的な視点から再構築することに成功している。これは現地調査と語学力，地域に対する理解がなせる研究であり，正に「歴史学者が現地調査をしたら」という好例であろう。

もっとも，神託や宗教書であろうとも，全てが同じ価値を有していたとは限らない点を考慮に入れると，青蓮教由来の「救済」がベトナムにおいては「植民地支配からの解放」と解釈されたことを「ベトナム的展開」（pp. 77, 124）と評するには，更なる検討が必要であろう。その変化を招いた要因を特定するにはまだ事例が少ない上に，実際のところ青蓮教以外がもたらした影響が大きかった可能性も否定できないからである。また，資料に基づく厳密さを求めるあまり，文中には東初祖派・東初派・普度門派や道統・法統など，似通った意味ながらも異なる表現が混在しているほか，同様の理由から混乱期の組織分裂・再編に関しては記述が省略される傾向が見られ，門外漢にはやや読み難い点も気になった。

とはいえ，昨今の編著としては珍しいほどに，一冊の専門書として問題意識や研究手法に統一を見ることができる，読み応えのある本であることに疑いはない。それは特にベトナムの華人社会について顕著であり，宗教資料を基に道統系譜を辿る試みは，読者に小気味良さと同時に，中国民衆宗教の伝播と受容に関し多くの知見を与えてくれる。空白地帯に先鞭をつけた研究成果に対し，敬意を表したい。

（北澤直宏・東洋大学国際観光学部）

横田祥子.『家族を生み出す――台湾をめぐる国際結婚の民族誌』春風社，2021，258p.

本書は，国際結婚が増加し台湾が「多文化」化するなかで見過ごされがちだった，仲介業者を経由する商業化された国際結婚に焦点を当てている。文化人類学者である著者は，2004年から2007年の現地調査，および近年の追加調査をもとに，長期にわたりその実態を検証してきた。

台湾で国際結婚が社会的な注目を集めたのは，2003年に国際結婚が総結婚数の3割を記録したという量的な側面もある。特に，ベトナムやインドネシアから台湾人男性に嫁ぐ「新移民」女性が急増した。また，いわゆる「新台湾の子」が，対中関係で揺れ続けてきた従来のナショナリズムや多文化主義の再考を促し，家族・社会に大きなインパクトを与えた。著者が，国際結婚の中でもとりわけ仲介業者を通じた結婚に焦点を当てているのは，そうした結婚を経た女性たちが人権面でより厳しい状況に置かれているからである。

本書の構成は2部6章から成る。第1章では，世界中で同時多発的に進行する再生産労働のグローバル化の一現象としての国際結婚について概